

## 当事者として学んだ備えの大切さ

京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授・センター長  
矢守克也

まず初めに、熊本・大分の被災地のみなさまに対して、心からお見舞いの気持ちをお伝えしたい。直接的な被害はもちろん、今後の生活再建、地域再生に向けてまだまだご苦労が多いことと思う。

筆者は、災害心理学、特に、防災教育、災害情報を専門とする研究者であるが、今回の地震で、熊本市東区で一人暮らしをしていた80歳代の義母（妻の母）が被災するという経験をもった。その後関西に移り住むことになった母は、今も「まさか熊本でこんな大きな地震が起きるとは…」と語る。本稿では、まず前半で、熊本地域における地震災害に対する備えについて、事前の地震想定および被害想定の見点からふりかえる。次に後半で、被災者の家族から見た熊本地震について報告したい。

### 1. 熊本地震—想定外なのか

まず、今回の地震活動そのものについて考えてみよう。たしかに、わずか約28時間余りの間に、同じ場所（益城町）が相次いで震度7を記録する激震に見舞われたことは、ほとんど前例がない経緯と言える。地震の発生メカニズムはまったく異なるものの、安政の南海トラフ地震などを念頭に、まったく考えられないパターンではないのかとの声も一部にはあるようだ。しかし、ほとんどだれも予想できなかった推移だとは言えるだろう。

さらに、地震発生後、震度1以上を記録する余震の発生回数は2016年12月13日時点で4,100回を超え、震度4以上に絞っても140回（うち4月末までに120回）に上った。熊本地震同様、内陸の活断層の活動によって引き起こされた地震で、かつ、余震活動が非常に活発であったとされている新潟県中越地震（2004年）でも、地震発生から1年後までの有感地震は約1,000回であった。熊本地震に伴う余震活動が異例の経緯をたどってきたことがわかる。

このことが、子どもや高齢者を中心に被災者の気持ちをいっそう不安にさせ、自宅等に戻るのを思いとどまらせた。さらに数ヶ月経っても、また地震が来るかもしれないとの懸念を払拭できず、本格的な片付けをしようという気持ちになれないとの声を多数耳にした。そして、車中を含む不自由な避難生活の長期化が、エコノミークラス症候群、熱中症、感染症といった課題をこれまで以上に顕在化させた。このように、非常に活発だった余震活動が復旧・復興活動に想定外の障害をもたらしたこと、これは事

実である。

しかし他方で、すべてが異例だったか、想定外だったかというところでもない。たとえば、今手元に「熊本県地域防災計画（地震・津波災害対策編、平成27年度修正版）」がある。もちろん、熊本地震が発生する前に刊行された文書である。この文書に、今後熊本県で予想される災害に関する被害想定が掲載されている。それによれば、最悪の場合、地震規模はM7.9が想定されるとある（今回、本震がM7.3）。そして、この最悪の場合とは、「布田川・日奈久断層帯中部・南西部連動型」の地震である。これは、まさに今回の地震を引き起こしたと考えられている断層帯である（活動部分は異なるが）。

しかも、文部科学省が、同じく熊本地震の発生前、平成28年1月に公表していた「今までに公表した活断層及び海溝型地震の長期評価結果一覧」（約200の活断層がリストアップされている）によると、「日奈久断層帯（八代区間）」は、M7.3程度の地震が今後30年間に発生する確率が「ほぼ0%~16%」（確率の最大値だけでランクづけると、全体の第3位にあたる）、「同（日奈久区間）」（M7.5程度）は同じく「ほぼ0%~6%」とされ、「我が国の主な活断層の中では高いグループに属する」（もっとも危険とされるグループ）にランクされている。「布田川断層帯（布田川区間）」（M7.0程度）は、これら2つよりは危険性が小さく見積もられているが（「ほぼ0%~0.9%」）、それでも、「我が国の主な活断層の中ではやや高いグループに属する」とされている。冒頭に紹介した母の「まさか熊本で」との油断を打ち破ることができるデータがまったくなかったわけではないことがわかる。

以下、「熊本県地域防災計画」に記載されていた主要な項目について、実際の熊本地震のデータと比較しながら列挙しておく、最大想定震度は7（今回、震度7）、想定死者数960人（今回、直接死50人、関連死102人）、想定負傷者数27,400人（今回、2,620人）、想定避難者数15万6千人（今回、4月17日朝に18万人超、しかし翌日は10万人程度に）、想定全壊建物数28,000棟（今回、8,360棟）、想定半壊建物数82,300棟（今回、32,261棟）、といった具合になる。（今回のデータは、すべて、2016年12月14日に発表された「内閣府災害対策本部：平成28年（2016年）熊本県熊本地方を震源とする地震に係る被害状況等について」による。）

要するに、前掲の地震そのものの想定と同様、大筋で「想定内」におさまっているのである。そして大切なのは、「想定内」なのに対応が決して十分でなかったことは、「想定外」の事態が起きてそうであるよりも問題が根深いということである。なぜなら、今回程度の規模の地震が発生しうることを、また、今回実際にそうだったよりもはるかに多くの犠牲者や建物被害が出ることを防災計画に明記しながら、それに対する対策を「本気」で講じていなかったことが示唆されるからである。

特に、「想定外」が問題視された東日本大震災以降、大きな被害想定、最悪の事態を「机の上」で計算し「頭の中」に思い浮かべてみるだけで満足する傾向が強まっていな

いだろうか。そうした想定や事態に対して、「本気」で備えようとしているだろうか。この町を、その庁舎を、あの校舎を、震度7なり、震度6強なりの揺れが襲ったとき、自分自身や自分にとって大切な人たちの命、あるいは、地域住民の命を守ることができるのか。「まさか熊本で」との言葉、そして、地域防災計画に見る「想定内の中の想定外」に鑑みると、今一度「本気」で行動を起こす必要があると思わざるを得ない。

## 2. 当事者として一できていたこと／できていなかったこと

ここまで自分のことは棚に上げてえらそうなことを書いてきたが、今回母が被災して、筆者は、自分自身がまさに「本気」でなかったことを思い知らされた。ここからは、その反省について書いていきたい。結論から先に述べておけば、何か目新しいことがわかったわけではない。以前から「やっておくといいですよ」と言われ続けてきたことが実際にとっても大切だと再認識したというのが実感である。裏を返せば、大切だと指摘されていたのに「本気」になれず手を抜いていたことは、確実に母の命を危険にさらす方向に作用した。今回、当事者になってみて、このことを身に染みて感じた。

筆者は、4月16日午前1時半頃発生した本震の約24時間後、16日の深夜に熊本入りし、母を筆者が暮らす関西に避難させた。高齢であるだけでなく、心臓が弱くペースメーカーを装着しており、他にも高血圧、糖尿病、太腿の動脈硬化による歩行困難など、いくつも健康上の不安を抱えていたからだ。

母は11階建てのマンションの9階に暮らしていた。本震による東区の震度は6強。自宅からは今回被害が集中した益城町(震度7を記録)を見渡すことができる距離である。揺れは大きかった。母は、幸いリビングルームにいた。幸いというのは、もし他の場所にいたら大怪我は免れず、母の体調を考えるともしかすると命にかかわったかもしれないからだ。

写真1はキッチン、写真2は和室の様子である。キッチンでは食器棚が、和室では仏壇などが倒れている。筆者の仕事の考えると反省の弁しか出てこないが、それぞれ家具固定していなかった。夜、母はリビングのソファでやすむことにしていたので、この部屋だけは腰の高さより高い家具を置かないようにしていた(以前は大きな書棚があったが撤去した)。それが母の命を守ってくれた。家具固定(撤去)は、現実に家族の命を守ってくれたのである。

本震直後、母は腰が抜けて歩けなくなっていた。すぐ停電したので、あたりは真っ暗である。しかし、普段から、小さな懐中電灯、携帯電話、保険証、身障者手帳、お薬手帳など一式を入れたハンドバックを手元に置いてやすんでもらうようにしていた(写真3)。これも、しばしば「やっておきましょう」と言われることの一つで目新しいことではないが、実際、母の命を救うことになる。



写真1：キッチンの状況（2つの大きな食器棚が倒れている）



写真2：和室（仏壇や鏡台が倒れている）



写真3：母が枕元に置き救出時に持ち出したハンドバックとその中身

母は、動けないまま、懐中電灯だけを手に周囲の様子を探っていた。その光に気づいてくれた方がいた。近所の商業施設の警備員さんだった。懐中電灯は、何かを見るためのものであると同時に、自分を見てもらうためにも役立つと知った。母が玄関までたどりつけなかったのも、その方はベランダ側から隣家との隔壁を蹴破り、リビングの窓を割って部屋に入ってきてくれた。

ひとまず助かった。しかし、もちろん、まだ終わりではない。足の悪い母を9階から地上まで避難させてくれたのは近所の若者であった（エレベータはもちろん使えない）。幸い、近所づきあいは豊かな方だった。マンションの管理組合（自治会）の方々も多くが、「あの部屋には一人暮らしの足の悪いおばあちゃんがいる」と知ってくれていた。地震の数ヶ月前に実施されたマンションの防災訓練に、帰省中の妻が参加していた偶然もよい方向に働いた。「防災の基本はご近所づきあいです」、「訓練には参加しましょう」—これらも防災対策の定番中の定番メニューであるが、今回その意味がよくわかった。

しかし、まだ心配材料はあった。寒いのに着の身着のままである。あわてていて薬を十分に持ち出せなかった。杖をついてしか歩けない母はこの後どうすればいいのか。

### 3. ご近所の底力と日頃の備え

母がマンション前に降り立つことができたのは、4月16日の本震発生からしばらく経

過した午前3時過ぎだった。やはり精神的に混乱していたのだろう。そのときになってはじめて「寒い」と感じたようだ。着の身着のままだったからだ。救いの手を差し伸べてくれたのがマンションの自治会の方であった。親切に自分のクルマに同乗させてくださり、夜明けまで車中で寒さをしのぐことができた。この方は、防災面の心得が大変豊富で、「狭い車中にいるのは身体によくない」と、朝になると小型のテントを自宅から出してくれた。おかげで母はゆっくり脚を伸ばすことができた。また、近くの学校に高齢者にも利用しやすい仮設トイレが設置されたと聞きつけると、そこまで連れていってくれた。

昼頃になって、母の携帯電話に親戚から電話がかかってきた。ある避難所（ホテル）の環境が大変いいという情報である。電気もすでに回復しているし、温かい食事も提供されているという。自治会の方が母をクルマで送り届けてくれた。ご自分は不便な車中生活に戻るのに、である。

しかし、母にとって、車中、テントに続く、第3の避難所であったホテルでの時間も長くは続かなかった。被災地では、良いも悪いも、いろんな情報があつという間にかきめぐる。好条件を知った被災者が殺到してきたのだ。そこはもちろん行政の指定避難所ではなく、好意で開放していただけである。さすがに対応できなくなって、「別のところへご移動ください」という事態になった。運良く、母は、つてを頼って、そのホテルからほど近い私立高校の建物の一室に避難することができた。16日夜のことであった。関西から熊本に駆けつけた筆者が母と出会うことができたのはこの避難所だった。

このように振り返ってみると、わずか24時間の間に、母は4回も移動している。4つの場所は、どれも行政の指定避難所ではない。そして、この間、この一人の被災者の動きを行政はまったく把握できていない。行政批判のためにこのように書いているのではない。被災直後はそんなものである。むしろ、災害時に自分や大切な人を守るためには、周囲の人の助けを求めることも含めて自分自身の努力が大切で、それだけが頼り—このことを今一度肝に銘じておきたいのだ。

幸い、母は大きく体調を崩すこともなく、関西で生活を再スタートさせることができた。上述の通り、家具固定等が不十分だったなど反省点もたくさんあった。他方で、写真3に示したハンドバックの備えは本当に役だった。母がそれを持ち出してくれたおかげで、関西でもすぐに投薬、治療を受けることができたからだ。そのことを熊本でお世話になっていた看護師の方に母が電話で伝えると、「それは、よかったですね。今、そのお薬、熊本中探しても手に入りませんよ」とのことだった。

#### 4. 高校生ボランティアに助けられて

残る問題は、自宅マンションの後片付けだった。母が暮らしていたマンションは致命的な損傷は免れたとは言え、室内はとんでもない惨状であった。特に、屋上の貯水施

設と一部の上下水道の配管が破損したことが災いした。そう言えば、救出される直前、電話越しに、母はしきりに「床が水浸しで大変」と訴えていた。「マンションの9階なのに？」と当初その意味がわからなかったほど、水による被害は恥ずかしながら私にとって想定外だった。水に濡れたものはすべて無闇に重くなり、またカビなどの発生源となって、後片付けの負担を大きくした。

何とか仕事のやりくりをして、本震から約半月後、大型連休に妻と後片付けに向かった。もちろん災害ボランティアの存在は知っていたし、水に濡れた家財一式を夫婦二人で何とかできるとは思っていなかった。熊本市でも災害ボランティアの募集が開始されたことも聞きつけていたので、「災害ボランティアセンター」に FAX で申込みを行なった。

しかし、待てど暮らせど返事はなかった。通常、ボラセンも当初は大混乱だ。仕事柄、その程度の知識はあったので、片付けの当日、ボラセンに直接出向いた（写真4）。すると、連休中ということもあり、案の定、ボランティアをしようという人が、ボランティアを求める人よりも、少なくともボラセンのマッチング現場では圧倒的に多数だった。こうして、ご縁あって、鹿児島県の神村学園という学校の先生と生徒さんにボランティアに来てもらうことができた。



写真4：筆者らが訪れたボランティアセンター（熊本市内）

正直、重労働だったと思う。まだエレベータが止まっていたからだ。かび臭い部屋での後片付け作業の後、次から次に出るゴミを、しかも水に濡れて重くなったゴミを、高校生たちは9階の部屋から1階のゴミ捨て場まで何十往復もして運びだしてくれた（筆者はわずか6～7往復でギブアップだった）。また、アルバムや貴重品とおぼしきものを見つけると、そのようにしなさいとの指導が学校からあったのだろう、「これは捨てていいですか」とていねいに確かめてくれた（写真5）。



写真5：母の住宅の片付けを手伝ってくれた高校生ボランティア

ボランティアに助けってもらうのは、案外むずかしい。「万一怪我でもさせてしまったら」とか、「ほんとにただ働きしてもらっていいのだろうか」とか、いろいろ考えてしまうからだ。未来の災害に備えて、機会があれば積極的に災害ボランティアにも出かけて助ける側に立つと、その経験を通じて、助けられる側の思いも理解できるようになると感じた。

筆者は、熊本地震から特に目新しいことを知ったという印象は受けなかった。くり返しになるが、むしろ、これまで「やっておくといいですよ」と言われ続けてきたことが、本当に大切だと実感した。ありふれた感想に帰着してしまったが、正直、これが最大の学びであった。



【参考文献】

熊本県防災会議（2015）熊本県地域防災計画（地震・津波災害対策編、平成27年度修正版）

政府地震調査研究推進本部（2016）今までに公表した活断層及び海溝型地震の長期評価結果一覧（平成28年1月13日現在）

内閣府（2016）平成28年（2016年）熊本県熊本地方を震源とする地震に係る被害状況等について（2016年12月14日18:00現在）